

19	安城	桜林小学校	名前 カワベナナ子 河邊菜々子
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

研究題目

叙述をもとに具体的に想像し、お互いの考えを認め合う子どもの育成
～3年国語科「ワニのおじいさんのたから物」の実践を通して～

研究要項

1 主題設定の理由

近年、子どもを取り巻く環境は急速に変化している。その背景には、グローバル化や障がいのある子どもへのインクルーシブ教育、家庭環境の多様化などが挙げられる。多様な価値観をもっている子どもたちが、教室の中で共に学んでいくためには、多様性の受容が強く求められる。本学級にも、外国にルーツをもつ子どもや発達障がいをもつ子ども、一人親の子どもがいる。本研究では、多様な考えをもつ子どもたちが、自他を尊重し、お互いの考えのよさや違いを認め合いながら共に学ぶ授業を目指す。

本学級の子どもたちは、登場人物の気持ちが分かる言葉や文を、叙述から探すことができる。自分の考えを仲間に伝えたいという思いをもっている子も多い。考えを仲間と共により広げ、深めていくために、登場人物の性格や気持ちを表す言葉に着目し、具体的に想像できるようになってほしい。また、話し合いや感想を伝え合う活動を通して、お互いの考えのよさや違いを認め合いながら、自分の考えをさらに広げてほしい。

本教材は、登場人物であるおにの子やワニのおじいさんの性格や特徴が分かる叙述が散りばめられている。子どもたちは叙述を手がかりして、物語の謎を読み解く活動をしていく。活動を通して、叙述をもとに起こった出来事を捉え、人物の気持ちや性格を具体的に想像できるようにしたい。また、多様な考えを受け止め、お互いの考えのよさや違いを認め合える授業を目指したい。

2 研究の内容

ア 目指す子どもの姿

- ・叙述から見つけた様子や気持ちを表す言葉をもとに、登場人物の性格や気持ちを具体的に想像することができる姿。
- ・自他の考えのよさや違いを捉え、共に認め合いながら課題について考える姿。

イ 研究の仮説と手立て

仮説1 性格や気持ちを想像する手がかりとなる言葉を提示したり、本教材の言葉辞典を作ったりすることで、登場人物の性格や気持ちについて、叙述をもとに具体的に想像することができるだろう。

手立て① 手がかりとなる叙述に鍵マークをつけて板書することで、着目した言葉が目立って視覚的に分かりやすくする。見つけた手がかりを見比べて考える時間を設定することで、登場人物の性格や気持ちをより具体的に想像することができるようにする。

手立て② 「しげしげと」「目を丸く」「すっとんきょう」など、単元の活動中に言葉の意味を確認できるように、本教材専用の言葉辞典を作る。言葉の意味を丁寧に確認し、考えていくことで、より具体的に想像できるようにする。

仮説2 子ども同士が話し合う場を設定することで、お互いの考えのよさや違いを認め合うことに繋がられるだろう。

手立て③ 課題について個人で考えた後、全体で話し合う場を設定し、手がかりとなる叙述と自分の考えを発表し共有することで、多様な考えを知ることができるようにする。焦点化したいキーワードが出てきた時、考えをより深めていくためにペアやグループで話し合う場を設ける。

ウ 抽出児Aについて

児童Aは学習に意欲的で、教師から出された課題に対して主体的に取り組むことができる。しかし、考えをもつことで満足してしまい、自分の考えだけにとらわれてしまうことがある。焦点化したい部分やキーワードに気付くことができるものの、根拠をもって具体的に想像する姿はあまり見られない。本研究を通して、児童Aが叙述をもとに登場人物の気持ちや性格を具体的に想像する姿を期待したい。また、自他の考えのよさや違いを認め合いながら学びを深めていってほしい。

エ 単元計画（9時間完了）

学習の流れ <u>注目させたい考え</u>	◎主な手立て
あらすじとはどのようなものかを 知ろう あらすじを書くときどんなことに 気をつければよいか【1】 - いつ、どこで、だれが、何をしたかをはっきりさせると分かりやすいね。 - 物語を理解しないとあらすじは書けないね。 場面ごとの謎を読み解こう どんな謎が見つかるかな【2】 - なんでホオノキの葉をかけてあげたのかな。 - なんでワニのおじいさんはおにの子にたら物をあげたのかな。 なぜ葉っぱをかけたのかな【3】 - ワニが寒いと思って、かけてあげた。 - ワニが死んでいると勘違いして、かけてあげた。	◎単元に興味をもつことができるように、学級文庫に「おにの話コーナー」を設置する。 ◎登場人物の気持ちをより深く読み解き、具体的に想像することができるように、言葉の意味を調べて言葉辞典を作る。 しげしげと まじまじと 目を丸く ◎子どもたちの知りたい、答えを探りたいという気持ちを引き出し、単元に興味をもつことができるように、課題を謎解き風に提示する。 ◎着目した言葉が目立って分かりやすくなるように、手がかりとなる叙述に鍵マークをつけて板書する。

どうしてたから物を知らないの
かな【4】

- ・悪者だと思われ続けているからじゃないかな。
- ・おにだとばれたくないから、ぼうしをかぶっていると思う。

たから物って何かな【5】

- ・おにの子にとっては、きれいな夕焼けがたから物なんだね。
- ・ワニのおじいさんのたから物と、おにの子にとってのたから物は違うね。
- ・たから物は1つじゃないから、それぞれ違っていいんだね。

登場人物の性格や気持ちを考えよう

どんな性格かな【6】

〈ワニのおじいさん〉

- ・おにの子にたから物をあげているから、優しい性格だと思うな。

〈おにの子〉

- ・ワニのおじいさんに葉っぱをかけてあげたから、思いやりがある性格だと思うな。

ワニのおじいさんはなぜおにの子に
たから物をあげようと言ったのかな
【7】

- ・葉っぱをかけてくれたって書いてあるから、おにの子にお礼がしたくて、たから物をあげたと思う。
- ・おにの子のことを信頼しているから、たから物をあげたと思う。

紹介カードをつくろう

どうしたらわかりやすく紹介できる
かな【8】

- ・短くまとめるためには、よぶんな文をけずるといいね。
- ・いつ、どこで、だれがに注意してまとめたよ。

みんなはどんな紹介カードを書いて
いるかな【9】

- ・〇〇さんのカードは短くまとめられるように言い換えてたね。
- ・場面ごとに整理することで、わかりやすくあらすじをまとめられたね。
- ・みんなの紹介カードを読むと、同じところや違うところがたくさん見つかっておもしろかったよ。

◎叙述をもとに想像することができるように、理由やヒントになりそうな文や言葉に線を引くように促す。

◎誰にとつてのたから物なのかを考えることができるように、72ページ6行目と9行目の「たから物」はそれぞれ何を意味しているのか問いかける。

◎おにの子の心が大きく動いたことを捉えられるように、おにの子の気持ちが表れている言葉の意味を確認する。

思わず □で言えないほど 目を丸く

◎お互いの考えのよさや違いを認め合うことに繋げられるように、ペアやグループ、全体で話し合う場を設定する。

◎子ども同士が多様な考えを受け止められるように、違う考えを認め合えるように、教師が肯定的な受容姿勢を示す。

◎性格や気持ちを、どの叙述をもとに想像したか分かるように、どの言葉に着目してそう考えたのかを発表するように促し、鍵マークをつけて板書する。

◎おにの子に宝物をあげた理由を考えることができるように、ワニのおじいさんの気持ちの変化が表れている言葉を鍵マークをつけて板書する。

すつとんきょう まじまじと にこっと

◎叙述をもとに具体的に想像し、考えを広げられるように、手がかりとなる叙述がある部分を全員で音読する。

◎自分とは違う考えに気付くことができるように、どのような出来事が入っているかや、どんな言葉を使っているかなど、どのような点に着目して読むとよいかを確認する。

◎グループで同じところ、違うところ、気付いたことを分けて感想を伝え合えるように、3色の付箋を用意する。

3 研究の実際

ア 仮説1の検証（手立て①）

叙述をもとに具体的に想像できるようにするためには、手がかりとなる言葉を目立つように提示することが有効だと考えた。鍵マークをつけて「謎を解くカギ」と称し、謎解き風の仕掛けを楽しんで活動に取り組めるようにした。

ワニのおじいさんの性格を考える時間では、児童Aは最初「69ページの2行目に急にねむい」と書いてあるから、ずいぶん長く寝る性格だと思う。」と発言した。多様な考えが出てくる中で、板書を見つめていた児童Bが「69ページの10行目に長い長い旅をしてきた」と書いてあるから、体力がある。」と発言した。すると、児童Aは「Bさんの手がかりを見て、ねばり強い性格だと思った。」と発表した。最後の振り返りでは、優しくて体力があり、ねばり強い性格だと記述している（資料1）。これらのことから、児童Aは自分が着目していなかった手がかりが児童Bから提示されたことで、新たな視点に気づき、登場人物の性格をより具体的に想像することができたと考える。



資料1 児童Aの振り返り

イ 仮説1の検証（手立て②）

「ワニのおじいさんはなぜおにの子にたから物をあげようと言ったのか」の謎について考える時間では、子どもたちは叙述から手がかりとなる言葉を探し、ワニの気持ちについて具体的に想像していた。この場面では、ワニのおじいさんの気持ちの変化が表れている言葉がある。たから物を知らないおにの子に驚き、おにの子の顔を見てたから物をあげようかじっくりと考え、最後に笑いかけてたから物をあげることを決める。ワニの気持ちの変化に迫ることができるように、該当部分を全員で音読するように促した。その後、ワニの気持ちが表れている言葉が見つかったか問いかけると、「すっとんきょう」



資料2 児童Aの振り返り

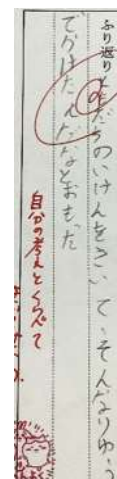
「まじまじと」「にこっと」の3つの言葉が出てきた。それぞれの言葉の意味を丁寧に確認し、「なぜにこっとしたのか」と追発問した。児童Aは「にこっと」した意味は、「大切にしてくれると思ったから。」と答えた。最後の振り返りで、児童Aは内容を付け足して記述した（資料2）。このことから、言葉の意味を丁寧に確認し、追発問をしたことで、登場人物の気持ちをより具体的に想像することができたと考えられる。

ウ 仮説2の検証

課題について個人で答えを探したり、考えたりした後、ペアやグループ、全体で話し合う場を設定することで、多様な考えを知り、お互いの考えのよさや違いを認め合うことに繋げられると考えた。

一場面で「なぜおにの子はワニにホオノキの葉をかぶせたのか」という問いに対して、児童Aは最初67ページの「死んだんだー」という言葉を手がかりにして、「呼んでも返事をしないから死んだと思ってかけた」と記述した。この授業内で児童Aの発言はなかったが、友達の発言をよく聞いて、「そういうことか。」「なるほど。」と反応する言葉をかける様子が見られた。振り返りでは「友達の意見を

聞いて一」と振り返った（資料3）。これまで、自分の考えにとらわれてしまうことが多かった児童Aが、友達の意見に耳を傾けたことが分かる。このことから、全体で共有することで多様な考え方に触れることで、他者の考えに興味をもつきっかけとなり、自分とは違う考えを認め合うことに繋がったと考える。



また、ペアやグループでの話し合いの場を設定した。ワニのおじいさんがおにの子にたから物をあげようとする場面において、さまざまな手がかりから考えが出てきた。その際に、頭の中を整理して自分の考えを確立できるように、グループで話し合いの時間を設けた。その後、考えを聞くと、友達の考えと自分の考えをつなげて、より具体的な考えや新たな考えを発表する子どもの姿が見られた。児童Aも、近くの席の子に自分の考えを伝える姿が見られた。このことから、少人数での話し合いを効果的に取り入れることで、お互いの考えのよさや違いを認め合うことに繋げることができ、自分の考えをより具体的に

資料3 児童Aの振り返り

4 手立ての有効性と仮説の検証

ア 仮説1について

手がかりとなる言葉に鍵マークをつけて提示して、着目した言葉を分かりやすく目立つように板書した。見比べる時間を設定したり、追発問したりすることで、自分が見つけた叙述だけでなく、板書して提示された言葉にも着目して考えることができた。児童Aも、友達が見つけた手がかりとなる言葉から、新たな考えを思いついたり、自分の考えをより具体的で確かなものにしたりすることができていた。よって、手立て①は有効であったと考える。

言葉辞典を用いて言葉の意味を丁寧に確認することで、登場人物の性格や気持ちをより具体的に想像することができた。児童Aは、「まじまじと」「にこっと」の言葉の意味を確認し、追発問をしたことで、おにの子にたから物をあげるまでに葛藤して考え、おにの子だからあげようと決めたワニの気持ちに迫ることができた。常に言葉辞典を机の上に置いて授業をしたことで、自分が気になったタイミングで意味を確認したり、学級で確認するときに役立てたりすることができた。子どもにとって、意味が難しいと感じる言葉は一人一人違う。キーワードとなる言葉の他に、自分が分からない言葉を好きなだけ書き込めるようにしたことで、それぞれが使いやすい辞典を作ることができた。こうして言葉の意味を丁寧に確認することで、登場人物の性格や気持ちをより具体的に想像することに繋がったため、手立て②は有効であったと言える。

イ 仮説2について

ペアやグループ、全体での話し合いの場を設定することで、多様な考えに触れ、他者の考えに興味をもち、お互いの考えのよさや違いを認め合うことができた。児童Aは、振り返りに「友達の意見を聞いて一」と振り返った。全体での話し合いを通して、自分の考えに友達の考えを付け足して、より具体的な考えをワークシートに記述した。また、少人数での話し合いを効果的に取り入れることで、自分と同じ考えだと気づいて自信につながったり、違う考えを知ることによって考えがより具体的になったり、新しい考えが生まれたりした。よって、手立て③は有効であったと言える。

5 研究の成果と課題

本研究を通して、手立ての有効性が見られたものの、足りない視点や新たな視点を得た。

手立て③にあったような子どもの話し合いの場における教師の働きかけである。子どもたちが自分の考えに自信をもち、友達の考えとつなげながら話し合っていくためには、教師の働きかけが重要だと考える。子どもの考えに対して反応する言葉、問い返しの発問、タイミング等、さまざまなことを考慮する必要がある。本単元では教師の問い返しが多く、子どもの思考が止まってしまったり、展開が早く追いつけなかったりすることがあった。問い返しを吟味して数を減らしたり、タイミングを見て子どもの意見が集まったところでゆさぶりをかけたりすれば、教師の働きかけがより有効に働くと考える。日々授業を振り返り、子どもの反応や振り返りの記述を見て反省し、次の授業へ繋げていきたい。

また、研究を通して、子どもたち主体の学びを深めていくためには、お互いをより認め合うことができる学級作りをしていく必要性を感じた。教師による肯定的な受容姿勢を継続的に示すことで、子どもたち一人一人が居心地がよいと思えるような授業作り、学級作りに努めていきたい。

本単元で最初にあらすじを書く活動をした際、児童Aは「なにを書いたらよいかわからない」と悩み、一文字も書かないまま提出した。しかし、最後に紹介カードを書く活動を行った時には、もくもくと自分の好きな場面についてまとめていた（資料4）。これは、児童Aが物語の叙述をよく読み、登場人物の性格や気持ちについて具体的に想像することができた結果だと考える。自分の考えだけでなく、学級の仲間の考えを聞いて、お互いの考えのよさや違いを認め合いながら、活動に取り組んでいた。これからも自他を尊重し、お互いの考えのよさや違いを認め合いながら、具体的に想像できる子どもを育てる授業づくりのために、日々学び続けていきたい。



資料4 児童Aの紹介カード